

『従属の代償』 布施 祐仁

講談社現代新書／2024年9月／1,078円（税込）

中国の急速な軍拡と米中対立の先鋭化、北朝鮮の核・ミサイル開発の推進、中国・北朝鮮とロシアとの軍事面での関係強化など、日本を取り巻く安全保障環境が非常に厳しい状況に置かれていることは言を俟たず、台湾有事の現実化への危機感も高まっている。こうした中、日米間の軍事同盟関係は一層強化され続けている。副題には「日米軍事一体化の真実」とあるが、その現実を決して対等な立場での「一体化」などと呼べるものではなく、自衛隊の米軍への非対称的な「従属」であることが、具体的にかつ多面的に明らかにされる。その「代償」がよもや戦争であってはならないはずであるが…。

『迷いのない人生なんて』 共同通信社編

岩波ジュニア新書／2024年5月／1,144円（税込）

偉人の成功物語ではない。迷い苦しみ、そして遠回りをしながらも豊かな人生を歩み続ける47人分の「名もなき人の歩んだ道」を連載した新聞記事をまとめたもの。背中を押され、元気をもらえる1冊。

『遊牧民、はじめました。—モンゴル大草原の掟』

相馬 拓也

光文社新書／2024年9月／1,100円（税込）

中華王朝の形成には多くの騎馬遊牧民が関係したが、日本に住んでいて遊牧民の暮らしをつぶさに知る機会はほぼない。昼夜の寒暖差が激しく、どこまでも広がる草原地帯の本当の生活はどういうものだろうか。現地でのフィールドワークを通じて、赤裸々に生々しく伝えてくれるこの書は、断片的なイメージだけで語られがちな遊牧生活の真実を、読者に突きつけてくる。モンゴル人やトルコ系を授業で語るときの参考にしてみてはいかがだろうか。

『ナチズム前夜—ワイマル共和国と政治的暴力』

原田 昌博

集英社新書／2024年8月／1,320円（税込）

民主主義という政治がいかに脆いものか。あのナチ党を台頭させたのは、当時もっとも「民主的」と評されたワイマル共和国での出来事である。政治的暴力が横行したあの時代の教訓はきわめて重要だ。

『与える人「小さな利他」で幸福の種をまく』

坂東 真理子

三笠書房／2024年3月／1,650円（税込）

新しい学習指導要領では、「学びに向かう力」の育成が求められている。「学びに向かう力」の育成のその先には、ウェルビーイングの実現がある。ウェルビーイングが「幸せな生活」とするならば、いったいどのような力が必要なのか。その一つの答えが、「利他」であると感じている。人から何かを与えられることだけが幸せであるというような、自分が得られるものを最大限に求める利己的な考え方が争いや対立を生んでいるのは事実である。筆者である坂東先生は、利他とは決して自己犠牲ではなく、「知らなかったことを知りたい」と学び、これらが自分を大切にする行動につながり、その延長で人を助ける力（与援力）につながると説いている。まさにこれこそ生きる力であり、学びに向かう力なのではないか。社会科では社会事象を自分ごととしてとらえ、生涯にわたって社会への貢献が、自らのウェルビーイングにつながっていくというマインドセットを養うことが大事であると痛感させられた。

『歴史学はこう考える』 松沢 裕作

ちくま新書／2024年9月／1,034円（税込）

大学で歴史を研究したいという生徒にカー『歴史とは何か』を読むよう勧める教員は、新訳も出たことだし、多いと思われる。最近だとリン・ハント『なぜ歴史を学ぶのか』（本紙90号で紹介）を勧めるかもしれない。これからは『歴史学はこう考える』が良い。本書が強く主張するのは、歴史学は史料を根拠に論じるという点だ。裏を返せば、それが世に適切に伝わっていないという危機感があるのだろう。歴史学者たちが史料をどう読んでいるかを、意識化して言葉にするのは非常に困難だ。それを見事に言語化しているのが本書の特徴である。具体的に論文を挙げて、論文の構造を明らかにし、史料をどう読んだから断定の文末になったとか、現在形で書かれたとか、理由を説明しているのが興味深い。これを、明治六年の政変・明治前期の蚕糸業・負債農民騒擾に関する昔の論文を取りあげて解説するので、この時期の政治・経済・社会を理解する上での手引きにもなる。最後に史学史を紹介しながら、再び、史料から分析する必要性に立ち返る。

※「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録商標です。

編修・発行 実教出版株式会社 代表者 小田 良次 <https://www.jikkyo.co.jp/>
2025年4月1日 発行 発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5 Tel.03-3238-7777